HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ゲルマン語類型論から見た ドイツ語の語順変化(1) : 名詞句成分
Author(s)	清水, 誠
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 138, 1-29
Issue Date	2012-12-07
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/51127
Type	bulletin (article)
File Information	01_SHIMIZU.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究科紀要 138 (2012)

ゲルマン語類型論から見た ドイツ語の語順変化 (1)

── 名詞句成分 ──

清　水　　誠

Mechanisms of Word Order Change in German
from the Viewpoint of Germanic Language Typology (1)
── Nominal Constituents ──

(*The Annual Report on Cultural Science* No. 138. Graduate School of Letters, Hokkaido University. Sapporo/Japan. 2012. ISSN1346-0277)

SHIMIZU, Makoto
(mshimizu@let.hokudai.ac.jp)

1．はじめに

一般に自然言語の語順はパターンが限られており，歴史的に変動が激しく，系統関係との相関も認めにくいとされている。伝統的な歴史比較言語学で看過されていた語順は，Greenberg (1963) が世界の言語の語順について 45 の含意的普遍性(implicational universals)を提唱したことを契機として，1970 年代に言語類型論との関連で注目された。それ以来，数多くの研究がなされている。

一方，ドイツ語史を鳥瞰すると，私たちが接しているドイツ語，すなわち標準ドイツ語は近代以降の産物にすぎず，ほんの短い歴史しか刻んでいないことがわかる。ヨーロッパの言語の中でも，とくに伝統的に地方性が色濃い

ドイツ語圏社会では，標準語の形成が複雑な過程を経てなされた。そのさいに大きく関与したのは，方言的多様性である。加えて，数多くの国に軒を接するドイツ語圏では，近隣のゲルマン語との関係も密接である。ドイツ語のルーツをたどろうとする場合，近年では，ドイツ語はヴェーザー・ライン川ゲルマン語（ド Weser-Rhein Germanisch），エルベ川ゲルマン語（ド Elbegermanisch），北海ゲルマン語（ド Nordseegermanisch）の異なる 3 グループを内包するという，マウラー（Friedrich Maurer）が 1952 年に提唱した説がほとんど共通の認識になっている。グリム（Jacob Grimm）の古典的名著 *Deutsche Grammatik*（1819）は実質的にゲルマン語全体を視野に入れた歴史文法記述であり，それ以降のドイツ語史研究がゲルマン語全体を射程に収めてなされてきたのは，当然の帰結といえよう。この点は，現代言語学の理論を取り入れた最新の研究成果でも，改めて重視されている。

従来の日本のドイツ語史研究では，扱う対象の範囲が標準ドイツ語に限定される傾向が強かった。ドイツ語諸方言を含むゲルマン諸語を考慮する意義についても，あまり理解が得られておらず，不十分な記述にとどまっている印象が否めない。ドイツ語史を類型論との関連からとらえようとする姿勢も，希薄といえる。ゲルマン諸語の言語事実は歴史的変遷を共時的に映し出す鏡であり，類型論の研究成果を援用することで，ドイツ語史にも有益な示唆がもたらされると考えられる。こうした問題意識から，本稿では，ドイツ語史を言語類型論とゲルマン諸語に関連づけながら，語順の変遷をめぐる理論的考察を試みたい。

上記の類型論的研究を代表する 1970 年代の業績として，Lehmann（1973 など），Vennemann（1974 など）がある。両者の説は細部で異なっているが，共通する部分が少なくない。その一端を紹介すると，動詞（V）と目的語（O）の語順は他の要素間の語順を決定し，OV 型の言語（OV 言語）と VO 型の言語（VO 言語）が主要類型になる。主語が目的語に先行する言語（SOV：約 45%，SVO：約 42%，VSO：約 9 %）比べて，目的語が主語に先行する言語（VOS：約 3 %；OVS：約 1 %，OSV： 0 %）は稀なので[1]，暫定的に主語は考慮外に置くことにする。その上で，文の構成素は，機能的に大別すると，

範疇の種類を決定する operand「演算項」(主要部) と性質を特定化する operator「演算子」(補部, 修飾部) からなっている。そして, OV 言語では〈operator—operand〉, VO 言語では〈operand—operator〉の配列がそれぞれ理想的な語順類型であるとみなされる。

〈operator—operand〉(OV 言語)	〈operand—operator〉(VO 言語)
目的語—動詞	動詞—目的語
本動詞—助動詞	助動詞—本動詞
名詞(句)—後置詞	前置詞—名詞(句)
属格/形容詞/関係節—名詞	名詞—属格/形容詞/関係節
副詞—動詞/形容詞	動詞/形容詞—副詞
比較項—形容詞	形容詞—比較項

ただし, 個別言語の分析には, 当該の言語それぞれの構造に即した具体的な説明がそのつど必要とされる。また, 一般に語順の類型と変化には, 統語論以外の諸要因がはたらいていると考えられる場合がある。本稿では, 以上の点を重視して, 語順類型をめぐる問題点, 古語の語順をめぐる問題点に言及した後で, ドイツ語の語順の変遷を名詞句とその成分, 文の骨格を形成する枠構造(文枠, sentencen frame, ド Satzklammer)の順序で論じていく[2]。

---

[1] カッコ内の数値は Tomlin (1986：22) による 402 言語の統計の引用である。

[2] 枠構造にかんする論述は次稿にゆずる。略語は次のとおり。ア：アイスランド語, アフ：アフリカーンス語, 印欧：印欧祖語, 英：英語, オ：オランダ語, 北ゲ：北ゲルマン語, 北フ：北フリジア語, ギ：ギリシャ語, ゲ：ゲルマン祖語, ゴ：ゴート語, 古高ド：古高ドイツ語, 古ノ：古ノルド語, ス：スウェーデン語, デ：デンマーク語, ド：ドイツ語, 西フ：西フリジア語, ニュ：ノルウェー語ニューノシュク, ブ：ノルウェー語ブークモール, フェ：フェーロー語, フェリ：北フリジア語フェリング方言, ラ：ラテン語, ル：ルクセンブルク語。

2．語順類型をめぐる問題点

しばしば指摘されるように，類型論研究で得られる言語普遍性（language universals）は一般的傾向にとどまり，確実性に今ひとつ乏しい場合が少なくない。じじつ，上記の統一的配列に完全に合致するのは，Greenberg（1963）が用いた 142 言語で 68 言語を数えるにすぎない。これを歴史的変化による逸脱とみなして，各言語は一貫性のあるどちらかの類型に歴史的に変化するという Lehmann（1973 など）と Vennemann（1974 など）の主張は，過度に理想的である。類型論は個別言語の分析にたいするモニター的役割は果たしても，決定的根拠にはなりがたいとみなすのが一般的な理解といえよう。

類型論的指標を拡大解釈することによって，誤解を招来することもある。その一例として，近年，日本語訳が出版された Whaley（1997，大堀他訳 2006）の記述を引用しよう。同書（1997：103，大堀他訳 2006：108-109）では，次のように述べられている。

> Finally, there are cases in which syntactic markedness may reveal basic constituent order. German (Germanic: German) has the order SVO in main clauses but SVO in subordinate clauses:
>
> (9) a. Der Mann sah den Jungen
> the man.NOM saw the boy.ACC
> The man saw the boy.
>
> b. Ich weiss[3], dass der Mann den Jungen sah
> I know that the man the boy saw
> I know that the man saw the boy.
>
> (Data from Comrie 1989)

[3] この weiss「知っている」は weiß の誤植である。なお，原文ではドイツ語の例文に 2 文とも文末のピリオド（.）が欠けている。

There are two reasons to consider SVO basic in German. First, although a subordinator is employed to introduce a subordinate clause (*dass* in (9b)), no special morphology appears on main clauses. Therefore, subordinate clauses are marked. Second, cross-linguistic evidence about historical change reveals that subordinate clauses tend to be more conservative of older ordering patterns. Thus, we predict that German used to be SOV in all clauses, but the basic order has changed to SVO. This newer order appears in the main clause, although the subordinate clauses have resisted the change and remain SOV.

この引用箇所からわかるように，同書では「統語論的な有標性によって基本構成要素順序が明らかになるケース」（大堀他訳 2006：108）として，主節で SVO，従属節で SOV のドイツ語を「SVO が基本である」（同上）とみなしている。その理由は，「従属節を導くには従位接続詞（9（b）では dass）を用いるが，主節には特別の形態は現れない。したがって，従属節が有標である」（同上），また，「歴史的変化についての通言語的証拠によれば，従属節は古い語順パタンをよりよく保つ傾向があることが知られている」（同上）ことによるという。しかし，ドイツ語では，特別な形態を欠く（Ø で示す）不定詞句も OV の語順を取るのであり（ド Der Mann behaputet, [Ø den Jungen gesehen zu haben].「その男は［その少年を見た］と主張している」），従属節の場合と矛盾する。また，新しい語順をなぜ基本語順とみなすべきかについても，根拠に乏しい。ここでいう基本語順とは，共時的な言語構造における概念であり，本来，歴史言語学的概念とは無関係のはずである。Whaley（1997，大堀他訳 2006）の上記の意見は，説得力のある説明になっていないといわざるを得ない。

さて，上述の語順類型には，統語論以外の要因も介在していると考えられる。operand と operator が統一的に配列されるという傾向は，伝達上の負担軽減と効率化を反映しているともいえる。文中の主語の位置についても，話題（topic）にかかわる語用論的要因が関与していると推定する理由がある。

たとえば，Greenberg（1963: Appendix II）によれば，VO 言語の中で少数派の VSO 言語は，多数派の SVO 言語よりも典型的な語順類型を示す傾向が認められるという。つまり，VSO 言語は全体の 90％以上が VO 言語に即した「前置詞＋名詞句」の語順だが，SVO 言語は全体の 40％近くが「名詞句＋後置詞」という逸脱した語順を取っており，しかもほとんど同じ割合で「属格・形容詞＋名詞」という逸脱した語順を示す。Greenberg（1963：110）の「普遍性 6 」には，「VSO の語順が優勢な言語はすべて，もうひとつまたは唯一の代替的な基本語順として SVO の語順を有している」（‘All languages with dominant VSO order have SVO as an alternative or as the only alternative basic order.’）と述べられているが，これについては，語用論的効果を伴う場合に多く観察されるという指摘がある。話題化（topicalization）を受けやすい主語は，動詞の後ろの位置から文の先頭に移動して生じた（VSO＞$S_1V_{-1}O$）とする意見も提出されている（亀井/河野/千野 1996：991）。このように，動詞で始まる言語が約 12％にとどまる事実は，統語論以外の要因によるとも推測される[4]。

3．古語の語順をめぐる問題点

3.1. 韻律上の制約 ── 初期ルーン語『ゲレフースの黄金の角杯』を例に

歴史言語学では，必然的に，現在では話者が失われた遠い過去の時代に由来する古語の資料を扱うことになる。容易に想像されるように，資料的制約を伴う古語の語順は，一般に扱いが困難な場合が多い。伝統的な歴史比較言語学において，語順が正面から扱われてこなかったのは，ひとつにはこのためでもある。ここで，古語の語順をめぐる問題点について，簡単に触れてお

[4] 一方，Kayne（1994）はすべての言語は SVO，つまり「指定部（specifier）―主要部（head）―補部（complement）」を基本語順としており，その他の語順はすべてもとの位置よりも上方の c-統御（c-command）する位置に移動する「左方移動」（leftward movement）によって生じるとしている。これは純粋に統語論的要因に基づいた強い普遍性の主張である。

くことにしよう。

とくに問題になるのは，韻律上の制約と翻訳原典の干渉である。しかし，それでも書き手が母語の姿をゆがめずに，柔軟に対処した可能性が十分に認められる場合がある。次に，北ゲルマン語と西ゲルマン語から具体例をひとつずつ取り上げて，検討してみよう。

まず，北ゲルマン語から，古ルーン文字（older futhark）で記されたゲルマン語最古の資料である初期ルーン語（Early Runic 200 頃〜500 頃）によるルーン銘文（runic inscription）を取り上げる。そのなかでも，とくに『ゲレフースの黄金の角杯』（デ *Guldhornene fra Gallehus* 400 頃）は有名である。これは Kuhn（1955：268）による提唱以来，北西ゲルマン語（North-West Germanic），すなわちゴート人が北欧を離れた紀元前 100 年頃以降，5 世紀半ばのアングロサクソン人のブリテン島移住とデーン人のユトラント半島植民までの時代に由来し，北ゲルマン語と西ゲルマン語に分岐する以前の資料とされることが多い。

ekhlewagastiz holtijaz horna tawido
私（ek-），ホルティの息子（holtijaz＜holt-「森」）のフレワガスティズ（-hlewagastiz＜hlewa-「名声」＋-gastiz「客」）が（この）角杯を（horna，英 horn(-s？)）作った（tawido）。

文末に置かれた定動詞（＝定形動詞 finite verb）である tawido「作った」は，ゲルマン祖語の基本語順を示唆するといわれることが多い。ただし，それと同時に，この銘文はゲルマン語最古の「詩」とも解釈されている。つまり，古ゲルマン詩の伝統に従って，2 つの語頭強音部（最初の部分は接語化（cliticization）した弱音部の ek-「私」を除く -hle-）を持つ短詩行を 2 つ重ねた 1 行の長詩行を形成しており（[ek*h*lewagastiz]＋[*h*oltijaz]｜[*h*orna]＋[tawido]），3 番目の短詩行にあたる *h*orna を中心として，3 つの h- の反復による頭韻（alliteration）を踏んでいるという解釈である（清水 2012b：23-24）。もしそうだとすれば，目的語 horna「角（＝角杯）」を意味的中心として，

この語を詩形の上で最も重要な 3 番目の短詩行に据え，苗字がなかった当時のゲルマン人の習慣にならって，h- の頭韻による父称 holtijaz「ホルトの息子」を伴った主語の人名 hlewagastiz「フレワガスティズ」はその前に置き，定動詞 tawido「つくった」は文末に置くという選択の余地しかなかったことになる。

それでも，この銘文は不可能な語順を強要されたのではなく，韻律上の要請と語順規則が整合した結果とみなすべき根拠がある。Antonsen（1975：24–25）によれば，6 世紀半ば頃までに由来する文の形を取った 34 のルーン銘文では，定動詞第 1 位の命令形を伴う 3 例を除いて，22 例（約 71%）において定動詞が文末に置かれている。それ以降の 14 例については，定動詞末尾（verb final）を示すのは 1 例にすぎない。このことから，上記の北西ゲルマン語時代は OV＞VO への過渡期であり，OV の語順が優勢だったが，それ以降の時代には OV の語順が支配的になったと推定される。さらに後代の古ノルド語（Old Norse 1050 頃〜1350 頃）の散文文献になると，定動詞は主文と従属文ともに，第 2 位以降の位置には現れない（‘das Verbum finitum tritt nicht über die zweite Stelle nach hinten’，Heusler（1967⁷：169））。Heusler（1967⁷：169）はこれを「古アイスランド語散文の『鉄則』のひとつ」（‘eines der „ehernen Gesetze“ der aisl. Prosa’）と呼んでいる。さらに，主文では定動詞第 2 位（verb second）と並んで，平叙文でも定動詞第 1 位（verb first）を示す例が非常に多い（ib. 169–171）。『ゲレフースの黄金の角杯』は，当時の一般的な語順とは矛盾しておらず，その後の語順の変化に示唆的な事実を提供しているといえる。

3.2. 翻訳原本の影響 ── 古高ドイツ語『タツィアーン』を例に

次に，翻訳テキストが原典の言語の干渉を伴っていることが懸念される例として，ラテン語版総合福音書の散文訳である古高ドイツ語（ド Althochdeutsch 750 頃〜1050 頃）の『タツィアーン』（ド *Tatian* 830 頃）を取り上げる。『ヨハネによる福音書 1，1–5』の冒頭に対応する部分をラテン語原典と比較しながら，定動詞の位置を確認してみよう。テキストは Sievers

(1966：13) から引用する。「/」は Fischer (1966：8) に掲載された原典写本のファクシミリ版から再現した行の区切りを示す。また，斜線は筆者によるもので，定動詞を表す。参考として，1545 年版の『ルター聖書』(ド *Luther Bibel*) の対応部分を添えて示す。

古高ドイツ語

In anaginne *uuas* uuort / inti thaz uuort *uuas* mit gote / inti got selbo *uuas* thaz uuort. / Thaz *uuas* in anaginne / mit gote. Alliu thuruh thaz / *vvurdun* gitán inti ûzzan sín / ni *uuas* uuiht gitanes / thaz thar gitán *uuas*. / Thaz *uuas* in imo líb / inti thaz lib *uuas* lioht manno. / Inti thaz lioht in finstarnessin / *liuhta* inti finstarnessi / thaz ni *bigriffun*.

ラテン語

In principio *erat* verbum / et verbum *erat* apud deum / et deus *erat* verbum. / Hoc *erat* in principio / apud deum. Omnia per ipsum / facta *sunt* et sine ipso / factum *est* nihil / quod factum *est*. / In ipso vita *erat* / et vita *erat* lux hominum. / Et lux in tenebris / *lucet* et tenebrae / eam non *comprehenderunt*.

ルター聖書 (1545)

Jm anfang *war* das Wort, vnd das wort *war* bey Gott, vnd Gott *war* das Wort. Das selbige *war* im anfang bey Gott. Alle ding *sind* durch dasselbige gemacht, vnd on dasselbige *ist* nichts gemacht, was gemacht *ist*. Jn jm *war* das Leben, vnd das Leben *war* das Liecht der Menschen, vnd das Liecht *scheinet* in der Finsternis, vnd die Finsternis *haben*s nicht begriffen.

『新約聖書』(日本聖書協会 1978：135)

「初めに言(ことば)があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初

めに神と共にあった。すべてのものは，これによってできた。できたもののうち，一つとしてこれによらないものはなかった。この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。光はやみの中に輝いている。そして，やみはこれに勝たなかった」

『タツィアーン』はラテン語原本にたいして，忠実に 1 行単位で行われた逐語訳である。各行はわずか数語にとどまるので，現在では名前の伝わっていない訳者にとって，古高ドイツ語の語順を適切に反映させるのは，容易ではなかったにちがいない。上記のテキストでは，定動詞の多くが主文第 2 位にある。なかには，Thaz *uuas* in imo lîb（ド es *war* in ihm das Leben）「この言に（＝その中に）命があった」）のように，現代ドイツ語の虚辞（expletive）にあたる thaz を用いて，主文定動詞第 2 位を保持しているように見える例もある。なお，並列接続詞 inti「そして」は，現代ドイツ語の und と同様に，この時代でも定動詞の語順には関与していなかった。一方，inti ûzzan sín / ni *uuas* uuiht gitanes / thaz thar gitán uuas「（そして）できたもの（＝つくられたもの）のうち，一つとしてこれによらないもの（＝それなしにつくられたもの）はなかった」では，一見すると，定動詞 uuas（受動の助動詞，ド war）が主文で第 3 位にあるようにも見える。しかし，ni（否定辞，現代ドイツ語の nicht の n- に相当）はアクセントを持たず，単独で音韻論的語（phonological word）を形成しない接語（clitic）なので，uuas は単独の文成分を構成していないとみなすことができる。したがって，定動詞 uuas はやはり主文第 2 位に準じた位置にあるといえる。これと同様に，inti finstarnessi / thaz ni *bigriffun*「そして，やみはこれに勝たなかった（＝それをとらえなかった）」でも，thaz「それ」と否定辞 ni を接語とみなせば，bigriffun「とらえた」は主文第 2 位に準じている。この接語の位置は「ヴァカーナーゲル位置」（Wackernagel position）と呼ばれ，「自立的アクセントを欠く要素は文の 2 番目に置かれる」という古い印欧語の傾向を一般化した「ヴァカーナーゲルの法則」（Wackernagel's Law）の名前で知られている（詳細は Wicka (2009)）。

Hinterhölzl/Petrova (2011：178) によれば，『タツィアーン』では，ラテン語原典とは異なる語順を示す主文の定動詞を分類すると，第 2 位が 382 例を占めるのにたいして，第 1 位は 96 例にとどまり，文末はわずか 11 例にすぎない。上記の *vvurdun* gitán「つくられた」，ni *uuas* uuiht gitanes「何もつくられなかった」でも，ラテン語原典での facta *sunt*「同上」，factum *est* nihil「同上」にたいして，定動詞が過去分詞に先行している。一般に古高ドイツ語期には主文定動詞第 2 位が優勢であり，第 2 位以後の位置を示す定動詞後置（ド Verbspäterstellung）の例では，①無アクセント代名詞，②無アクセント副詞，③名詞句を伴う副詞句が介在していることが多い（Schrodt 2004: 201–202)。①②は接語の場合である。③は『タツィアーン』に頻出するパターンで（ib. 202)，Alliu thuruh thaz / *vvurdun* gitán「すべてがそれによってできた（＝つくられた)」（ラ Omnia per ipsum / facta *sunt*）の vvurdun（受動の助動詞，ド wurden)，Inti thaz lioht in finstarnessin / *liuhta*「(そして）光はやみの中で輝いている（＝輝いていた)」（ラ Et lux in tenebris / *lucet*）の liuhta「輝いていた」がその例である。これはラテン語原典の sunt，lucet「輝いている」が別の行にまたがっているためと考えられ，そのために，当時としては稀になっていた第 2 位以後への定動詞後置という古風な語順を援用したのだろうと推測される[5]。800 年頃に成立したとされる古高ドイツ語の韻文作品『ヒルデブラントの歌』（ド *Das Hildebrandslied*）や『イシドール』（イージドーア，ド *Isidor*）の翻訳には，主文定動詞末尾の例もあるが，古高ドイツ語後期には少なくなる（用例は Schrodt（2004：202–206）参照)。文字を記す行為が稀だった当時は，散文であっても話し言葉を直接には反映しない傾向が強く，古風な語順が用いられることがあったと推測することもできよう。

古高ドイツ語期の主要文献の多くは，修道院の書房で成立した宗教文献で占められている。それはドイツ語を母語とする同胞たちへのキリスト教布教

[5] この定動詞第 3 位の語順は古高ドイツ語に比べて，古英語と古いザクセン語では，より頻繁に見られる（Hinterhölzl/Petrova 2010: 318–320)。

を目的とした翻訳，ないしは創作的な翻訳である。こうした事情から，当時のドイツ語話者にとってなじみがなく，すでにだれの母語でもなかった古典ラテン語の語順を盲目的に借用したとは，考えにくい。中世ラテン語でも，定動詞末尾は稀になっていた（Fleischer/Schallert 2011: 170–172）。当時の『タツィアーン』に代表される古高ドイツ語では，主文定動詞第 2 位は厳密な規則として未確立の部分はあったとしても，すでにかなり一般的になっていたと考えられる[6]。

4．名詞句の語順をめぐって

4.1. 定冠詞と名詞の語順 ── 前置定冠詞と後置定冠詞

以上の点を踏まえて，ドイツ語の語順の変遷を考察していこう。

名詞句内の語順は，動詞と目的語を中心とする VO/OV 型の分布からしばしば逸脱している。まず，すべてのゲルマン語で発達している定冠詞と名詞の語順を取り上げる[7]。

最初に，次の点を確認しておこう。伝統的な扱いでは，Lehmann（1973 など），Vennemann（1974 など）の分類として，名詞句（noun phrase, NP）を設定した上で，定冠詞などの限定詞（determiner）を operator，名詞を operand のように図示していることが少なくない（柴谷 1989：29f., Yoshida 2004: 203）。しかし，現在では，der Mann「その男」は定冠詞 der を operand に相当する主要部とみなして，限定詞句（determiner phrase, DP）を形成しているとする見解が一般的である[8]。der Mann は der「その人」に置き換えられ，形容詞の語形変化の種類と名詞句の定・不定の区別は，限定詞に依存している。文法情報の表示についても，d- を語幹とする限定詞に大幅に移行

[6] 3.1. と 3.2. で述べた古ゲルマン諸語における定動詞の位置にかんする記述は，後述するゲルマン語の枠構造の成立と変遷にも関係している。

[7] 不定冠詞は一般に発達が遅く，アイスランド語では現在でも未発達である。

[8] 本稿では用語上の混同を避けて「名詞句」で統一する。

している（主格 d*er* Mann―対格 d*en* Mann―与格 d*em* Mann*(e)*―属格 d*es* Mann*(e)s*）。女性名詞に至っては，単数形が完全に無変化になっている（主格 d*ie* Frau「女」―対格 d*ie* Frau―与格 d*er* Frau―属格 d*er* Frau）。Roehrs（2009）のように，限定詞句における指示代名詞や定冠詞は動詞句における助動詞に相当し，「名詞句の助動詞」（nominal auxiliary）とみなすことができると主張して，ゲルマン語の限定詞句の構造を中心に論じている例もある。

上記のことは，所有代名詞と名詞の関係にもあてはまる。近年，ドイツ語圏で出版され，反響を呼んだドイツ語の特徴にかんする教養書に，*Der Dativ ist dem Genitiv sein Tod*『与格は属格の死なり』がある（Sick, Bastian. 2008. Köln: Kiepenheuer & Witsch）。同書の題名は，標準ドイツ語の属格が話し言葉で衰退し，「与格名詞句＋所有代名詞＋名詞句」に取って代わられる傾向があることを指している。生成文法のXバー理論（X-bar theory）に従えば，dem Genitiv sein Tod「属格の死（＝属格，その死）」は与格で現れた dem Genitiv「属格」を指定部とし，所有代名詞 sein「その」は限定詞に相当する主要部，Tod「死」はその補部とする限定詞句と分析され，主要部 sein と指定部 dem Genitiv の一致（agreement）を示している。なお，低地ドイツ語（mien Vad(d)er sien Huus「私の父の家」）をはじめとするドイツ語諸方言，西フリジア語（ús heit syn hûs「同左」），アフリカーンス語（my vader se huis「同左」）などのように，この形式がすでに一般的で，属格が衰退している例も少なくない。

ちなみに，印欧語を特徴づける統語構造を類型論的に考察した Comrie（1998：92）は，一致のタイプを主要部表示（head-marking）と従属部表示（dependent-marking）に分類した Nichols（1986）に従って，主語と述語の一致（subject-predicate agreement）を印欧語で「唯一の主要部表示の例」（‘the only instance of head-marking’）とみなしている（例　ド der Mann（＝従属部）komm***t***（＝主要部）「その男が来る」）。しかし，上記の分析に従って，伝統的な名詞句を限定詞句ととらえ直せば，かならずしもそうとはいえないことになる。なぜなら，d***er***（＝主要部）Mann（＝従属部）「その男」を

定冠詞 der を主要部とする限定詞句と理論的に解釈し直せば，ここでも主要部表示の例が観察されるからである。

さて，ここで定冠詞と名詞の語順に話題を戻すと，上記の見直しに従えば，VO 言語の特徴というべき「定冠詞―名詞」（ド der Mann）の語順は，英語など少数の例を除いて，従属文が定動詞末尾の語順を取り，OV 言語の性格を示す大多数の西ゲルマン語とは，類型論的に相容れないことになる。一方，従属文で定動詞末尾を示さなくなった北ゲルマン語は，VO 言語にもかかわらず，「名詞－定冠詞」（ア maður*inn*，フェ maður*in*，ス mann*en*（← man），ブ•ニュ mann*en*（← mann），デ mand*en*；-inn/-in/-en：定冠詞）の語順を示している。現代ゲルマン諸語は，ユトラント半島中央部を境に，東側の北ゲルマン語に共通の「後置定冠詞」（postposed definite article，「名詞－定冠詞」），西側のデンマーク語西ユトラント方言（デ vestjysk）と西ゲルマン語の「前置定冠詞」（preposed definite article，「定冠詞―名詞」）という分布を示す（清水 2012a：98）。詳細は未詳だが，大きな山も川もないユトラント半島を縦断し，ゲルマン語の形態論的特徴を 2 分するこの等語線が成立した背景には，5 世紀のブリテン島移住によって古英語の方言を形成し，現在のデンマーク語話者とは別の部族であるジュート人（Jutes）の言語が基層（substratum）として影響したのかもしれない。後の時代の北ゲルマン人によるユトラント半島進出，西ゲルマン語に属する低地ドイツ語との接触などが作用した可能性も考えられよう。

歴史言語学的に見ると，ゲルマン祖語には定冠詞はなかったと推定されている。初期ルーン語やゴート語をはじめ，古ノルド語や古高ドイツ語でも，定冠詞は発達途上であり，古英語と古ザクセン語でも，ある程度の発達段階にとどまっていたとされている（Ramat 1981: 85–88）。ゲルマン語の定冠詞は，2 種類の指示代名詞，①ゴ sa（男性）/sō（女性）/þata（中性），古英 sē/sēo/þæt，古ノ sá/sú/þat＜ゲ *s-/*þa-＜印欧 *so-/*to-，②古ノ -inn/-in/-it＜ゲ *jai-na-＜印欧 *-eno- に由来している（Prokosch 1939: 273–274, Jasanoff 1994: 268）。両者は直示的な（deictic）機能の消失とともに，アクセントを失い，前者は西ゲルマン語，後者は北ゲルマン語を中心として定冠

詞に発達していった。

私見では，上記の定冠詞の位置の相違は，動詞と目的語の語順とは無関係であり，次のような韻律論的要因が関係していると推定される。

まず，北ゲルマン語の後置定冠詞は，古来のゲルマン語の語頭アクセント（initial accent）の保持と関係があると考えられる。指示代名詞が直示的機能とアクセント（強さアクセント stress accent）を失う過程で発達した定冠詞は，名詞に接語化し，全体で 1 語の音韻論的語を形成するようになった。北ゲルマン語では，ゲルマン語古来の語頭アクセントの保持が顕著であり，有アクセントの語頭音節が後続音節の母音の素性を先取りするウムラウトや母音自体を吸収する「割れ」（breaking，ア björk「白樺」<古ノ bjǫrk<*bĕǫ́rk<*béorka<*bérka）を豊富に有していた（清水 2012b：70–73）。北ゲルマン語はまた，語頭アクセントに基づく頭韻を用いた古ゲルマン詩の伝統を長く保ち，アイスランド語ではゲルマン語で唯一，現在でもすべての語の語頭音節にアクセントがある。以上の理由から，北ゲルマン語は無アクセントの定冠詞を名詞に前接することを嫌って，後接したと考えられる。具体的にいうと，後置定冠詞は，指示代名詞 inn が指示的意味を失って無アクセントになり，maðr *inn* gamli「その（inn）老いた（gamli）男（maðr）」> maðr*inn* gamli という変化で生じたとされている（Heusler 1967[7]: 127）。形容詞を伴わない「名詞＋後置定冠詞」は，1000 年頃に最初の例が確認されている（Noreen 1970[5]: 316–317）。

一方，西ゲルマン語では，無アクセント接頭辞を発達させ，詩法の上からも脚韻詩に転じたように，早くから語頭アクセントの原則が崩れ，指示代名詞は名詞に前置して，定冠詞に発達した。周知のように，ドイツ語の定冠詞はアクセントを持てば，指示代名詞としてはたらく。英語の the は指示代名詞 that とは別形だが，強調形 the［ðíː］には指示的意味が残っている。

このほかに，古ノルド語には指示代名詞 hinn/hin/hit もあった。その起源は，無アクセントに弱化して語頭の h- を失い，-inn/-in/-it になったか，ドjener/jene/jenes と同源の定冠詞 -inn/-in/-it に指示的要素 h-（英 *h*e/ド *h*ier/北ゲ *h*an(n)「彼，それ」と共通）を付加したという 2 つの説に分かれる

(Ásgeir 1989: 329, De Vries 1977²: 228, 286)。古ノルド語には，これを名詞の前後に配置する*(h)inn* maðr↔maður*inn*「その男」，*(h)inn* gamli maðr↔maðrinn *(h)inn* gamli「その老いた男」という形式があった。現代アイスランド語では，後置定冠詞による maður*inn*「その男」，gamli maður*inn*「その老いた男」しか残っていない。指示代名詞による *hinn* gamli maður「その老いた男」は古風で，通常の hinn の使用は「もう一方の」の意味か，hinn daginn「明後日」などの成句に限られている。一方，上記の①の指示代名詞による *sá* gamli maður「その老いた男」は，指示的意味を保っている。その他の北ゲルマン語では，限定用法の形容詞を伴う場合に，西ゲルマン語と同源の①の指示代名詞が前置定冠詞（den/tann）に弱まり，「den/tann＋形容詞＋名詞＋{-inn/-in/-en, -nir/-na/-ne, -Ø}」という形式に発達した（フェ *tann* gamli maður*in*，ス *den* gaml*a* mann*en*，ブ・ニュ *den* gaml*e* mann*en*，デ *den* gaml*e* mand)。デンマーク語を除いて，後置定冠詞と前置定冠詞の二重限定（ド Doppelbestimmung）を示す点が特徴的である。

限定用法の形容詞を伴う場合に前置定冠詞を用いるのは，対象を限定する指示的意味を保ったためと考えられる。これについて示唆的なのは，ユトラント半島南部ドイツ領に属する南シュレースヴィヒ地方西部に位置し，北ゲルマン語の南側に隣接する西ゲルマン語の北フリジア語（北フ Nordfriisk）である。島方言の中で最も話者が多いとされるフェーア島（ド Föhr）で用いられるフェリング方言（フェリ fering）を例に取ろう。フェリング方言の定冠詞には，もともと指示的意味を表していた d- の有無によって，無アクセントの一般形 a と強調形 de があり，次のような意味の相違を伴って名詞に前置して用いる。

フェリ ① *A* *dring* hee *a* *fut* breegen.
the boy has the foot broken
男の子は足を骨折した
A *san* skintj.
the sun shines

太陽が照っている

A aapel fäält ei widj faan *a buum*.
the apple falls not far from the tree
リンゴは木から遠くに落ちない（＝蛙の子は蛙。ことわざ）

② Hat hee en dring. *De dring* wurt temelk ferwenet.
she has a boy the boy is rather spoiled
彼女には男の子がいる。その男の子はかなり甘やかされている

De maan, diar nü komt, as man bruler.
the man who now comes is my brother
今，やって来る男の人は私の兄弟です

定冠詞一般形 a は指示的意味が希薄で，文脈や状況に直接言及する必要性が低い場合に用いる。たとえば，①の a dring「男の子」は誤解の余地がない既知の対象を示すと解釈される場合であり，a fut「足」では区別の必要がない身体部位に用いている。次の文の a san「太陽」は唯一の対象なので，指示して区別する必要がない。その次の文はことわざであり，a aapel「リンゴ」，a buum「木」は特定の対象を指示しているのではない。一方，定冠詞強調形 de は指示的機能を残しており，②の de dring「その男の子」は前文の en dring「男の子」を指している。これは前方照応 (anaphora) ではなく，文脈内指示 (textual deixis) の例といえる。その次の文の de maan「その男の人」は後続する関係文 diar nü komt「今，やって来る（ところの）」によって限定された先行詞であり，de はやはり指示的意味を持っている（清水 2002：112-114)。

4.2. 形容詞と名詞の語順 ── 同格表現，修飾句，複合語

このほかにも，名詞句内の語順は，動詞と目的語を中心とする VO 型/OV 型の分布からしばしば逸脱している。このことを重視して，Hawkins(1983) のように，前置詞 (Pr) と後置詞 (Po) を類型標識とみなして，3 項間の「通

カテゴリー調和」(Cross-Category Harmnony) に基づく「前置詞型言語 Pr → (NA → NG)」と「後置詞型言語 Po → (AN → GN)」という例外の少ない代案を提唱している例もある。ゲルマン祖語の文の基本語順を SOV と推定した Smith (1971：212-243) と Hopper (1975：60-63) も，名詞句については意見が一致せず，前者は NA/NG ないし GN，後者は AN/GN としている。また，Speyer (2007：117) はギリシャ語原典の影響を認めつつ，ゴート語では「指示代名詞＋形容詞＋名詞」(sa gōda haírdeis「その良い羊飼い」) が優勢であり，「名詞＋指示代名詞＋形容詞」(haírdeis sa gōda「同上」) は前者の語順から名詞移動によって派生したと述べている ([NP haírdeis$_1$ [NP sa[N' [AP gōda] t$_1$]]])。一方，指示代名詞を欠く場合には，形容詞は名詞に後置する例が多く，属格はどちらの場合も名詞に後置するのが一般的であるしている。

以下では，これとは別に，修飾要素 (modifier) か同格 (apposition) かという点に注目してみよう。

印欧語の形容詞と名詞は，語形変化の上で代名詞，冠詞，数詞とともに名詞類 (nominal) という同一の範疇に属している。周知のように，語形変化は inflection と総称されるが，名詞類の語形変化は declension，動詞の語形変化は conjugation と呼ばれ，別の名称で区別される。歴史言語学的に見ると，名詞類の中で形容詞の特徴は，性 (gender) と自由に結びつく能力 (ド Motionsfähigkeit) にあり，古くはゲルマン語の形容詞は母音語幹で有力な「a-語幹」(男性・中性) と「ō-語幹」(女性) に大幅に移行した。形容詞はまた，名詞としてもはたらくことがある。ゲルマン語では，形容詞の強変化と名詞の語形変化が一致しない場合が多いが，これは古くは指示的要素を伴っていたとされる代名詞変化 (pronominal declension) が本来の名詞変化 (nominal declension) に混入したことによる (千種 1984)。

形容詞の強変化 (strong declension) は印欧語に広く共通しているが，弱変化 (weak declension) はゲルマン語独自の革新である。形容詞の弱変化は，上記の強変化・代名詞変化が指示的意味を失う過程で，「個別化」(individualization) を表す名詞派生接尾辞だった「n-語幹」を語形成 (造語論 word forma-

tion) から語形変化 (活用 inflection) に拡大した結果である (ギ agathós「善良な」>Agáthō*n*「アガトーン」(男名,「善良という性質の個別的具現」)。ドイツ語で形容詞弱変化が定冠詞類と共起するのは,そのなごりであり,弱変化語尾 -e/-(e)n はゲルマン祖語ですべて -n を伴っていたと推定されている。北ゲルマン語の -i/-a/-u/-e で終わる弱変化も,後の時代に -n が脱落した結果である。

形容詞弱変化は,修飾か同格かという問題の好例になる。たとえば,wir Armen「私たち貧者」の Armen は形容詞 arm「貧しい」の名詞用法で wir「私たち」と同格であり,無冠詞だが限定された対象を指すので弱変化である。この場合,日本語の「貧しい私たち」に対応するような修飾表現は,ドイツ語としては不可能である。さらに,ドイツ語には Karl der Große「カール大帝(=カール,その偉大な者)」という同格表現がある。これは der große Karl「偉大なカール」という修飾表現とは異なるが,弱変化語尾が名詞派生の役割を保っていた時代には,große は「偉大な者」という名詞相当語で同格表現だった可能性がある (Ringe 2006: 170)。

形容詞弱変化語尾が名詞派生接尾辞のはたらきを保っていたとすれば,たとえば 4.1. で挙げた古ノルド語の(h)inn gamli maðr, maðrinn (h)inn gamli は,「その老いた男」という修飾構造のほかに,「男,その老いた者」という同格構造とも解釈できることになる。Ólafr helgi「聖オーラヴル (=聖なるオーラヴル)」という例では,限定詞を伴わずに helgr「聖なる」の弱変化形 helgi が現れている[9]。また,*Ólafs saga helga*『聖オーラヴルのサガ』では,Ólafr helgi の属格が分離して saga「サガ」を前後から修飾している。さらに,*Ólafs saga helga hin sérstaka*『聖オーラヴルの別個のサガ』では,これに加えて saga hin sérstaka「(その) 別個のサガ」も分離している。こうした例は同格表現とみなせば,無理なく解釈できる。

[9] 古ノルド語では弱変化による Eiríkr rauði「赤毛のエイリークル」と並んで,強変化による Eiríkr rauðr「同上」もある。これは弱変化の発達以前に,強変化の代名詞変化にも指示的機能があったことを示唆している (千種 1983)。

さらに，ゴート語には，関係節が先行詞に先行する例が 3 例，確認されている（Streitberg 1920[6]: 229）。下例（斜体字が関係文）の sei は，指示代名詞女性単数主格 sō に補文標識（complementizer, COMP）としての不変化詞 ei を付加した語形で，後続の女性名詞と一致している。これはたとえば①のように，「私に帰するべきもの（sei undrinnai mik），すなわち財産の分け前（dail（← dails の対格）aiginis）」に類した同格表現とも解釈できる。ギリシャ語原典は実質的に同じ語順だが，関係文ではない。

ゴ ① *sei* *undrinnai mik* dail aiginis（ルカによる福音書 15，12）
which falls to-me share of-property
私に帰するべき財産の分け前
（ギ *τὸ ἐπιβάλλον μέρος τῆς οὐσίας*）

② *sei* *bauip* *in mis* frawaúrhts（ローマ人への手紙 7，20）
which dwells in me sin
私の中に宿っている罪
（ギ *ἡ οἰκοῦσα ἐν ἐμοὶ ἁμαρτία*）

③ *sei* *us* *guda ist* garaíhtei（ピリピ人への手紙 3，9）
which from god is justice
神からのものである正義
（ギ *τὴν ἐκ θεοῦ δικαιοσύνην*）

中高ドイツ語期（ド Mittelhochdeutsch 1050 頃〜1350 頃）以降，形容詞は散文で名詞に前置する傾向が強まった。一方，属格は 14 世紀以降，諸方言で衰退したが，文章語では後置する例が増えた（Dal 1966[3]: 179–181）。この事実は，属格が限定詞と統語論的に相補分布をなすようになったことを示している。現代ドイツ語では，無冠詞の固有名詞は単独で Anna*s* Buch「アンナの本」のように名詞に前置できるが，女性名詞とは無縁の-s を伴うことからうかがわれるように，本来の属格とは異質であり，英語などの所有格（Anna *'s* book）に近い。これは Arbeit*s*lust「労働意欲」（Arbeit「労働（女

性名詞)」+Lust「意欲」) などの接合の -s (ド Fugen-s) と共通しており，語形成と関係があると考えられる。

これに関連して，ドイツ語には Gotteshaus「教会＜神の家」，Großstadt「大都市＜大きな都市」など，「属格＋名詞」，「形容詞＋名詞」が複合名詞になった数多くの例がある。この種の複合名詞では，名詞句と区別しがたい場合が少なくない。Großstadt の groß- が無語尾になっている歴史言語学的な理由は，前述のように，古くは形容詞には，代名詞変化に由来する有語尾形と並んで，名詞変化に由来する無変化形が単数主格で並存していたことによる。また，オランダ語では，語尾 -e を伴った名詞句 een grot*e* man「大柄な男」(groot「大きい，大柄な」) にたいして，無変化の een groot man「偉人」(groot-「偉＜偉大な」) は複合名詞の性格が強い。ただし，複数形ではともに語尾 -en を伴った grot*e* mannen となり，区別がなくなる。さらに，形容詞の語尾を失った英語では，universal grammar「普遍文法」の universal は限定用法の形容詞のようでもあるが，ドイツ語の Universalgrammatik「同上」では universal- は複合語の一部になっている。

一般に名詞句内部の語順には，語内部の形態素配列の原則が関与する傾向が認められる。これは形態論的要因による語形成の問題であり，共時的には統語論的な語順類型とは別の扱いを要する。ゲルマン語では一般に「被支配要素＜支配要素」という主要部後置が原則であり，語幹に語尾が後続し，派生語では接尾辞，複合語では最終要素がそれぞれ文法的性質を決定する。接頭辞は語彙的意味，アスペクト (aspect)，結合価 (valency) を変更することはあっても，品詞は決定しない。英語の to *un-*/*dis*burden (名詞 burden)，to *en*sure (形容詞 sure) などは，フランス語からの借用語も含まれるが，品詞転換 (conversion) による派生動詞に属し，接頭辞の付加は語彙的意味を付与するにとどまると考えられる。ただし，過去分詞で接尾辞 -t/-en と共起するドイツ語やオランダ語などの ge- は，形態的に余剰的だが (ド singen「歌う」—*ge*sungen，オ zingen「同左」—*ge*zongen)，母音交替と語尾を廃し，唯一の過去分詞の標識に発達したアフリカーンス語の ge- は，主要部前置を示す稀な例外といえる (アフ sing—*ge*sing)。複合名詞からの逆成 (back-

formation）によるドイツ語の非分離抱合動詞（staubsaugen「電気掃除機で掃除する」（＜Staubsauger「掃除機」，Staub「塵」＋saugen「吸う」），不定詞句から派生した抱合不定詞（Er ist am *Briefeschreiben*.「彼は手紙書きをしている」（Briefe「手紙」＋schreiben「書く」））も，OV 型の主要部後置の語順を示す（清水 2005）。VO 型の英語でも，抱合動詞は OV 型の主要部後置の語順を示す（to sightsee, to birdwatch）。

4.3. 形容詞語尾の変遷 ── 非連続構成素と冠飾句

現代ゲルマン諸語では，動詞と目的語は移動やかきまぜ（scrambling）によって自由に隔てられるが，名詞と形容詞，属格，限定詞は基本的に隣接している。一方，印欧語の古語ではかならずしもその必要はなかった。次のラテン語の例は，オウィディウス（Ovidius）の韻文作品『転身物語』（ラ *Metamorphoses* 後 8 頃）の冒頭だが，長短短 6 歩格詩行（dactylic hexameter）という韻律上の要請に沿って，名詞句内の要素が離散して現れている（「/」は行の区切りを示す）。

ラ　in　nova　fert　animus　mūtātās
　　into　new-ACC-PL-NEUT　lets-PRS　soul-NOM-SG-MA　changed-ACC-PL-FEM
　　dīcere　fōrmās　/ corpora
　　tell-INF　forms-ACC-PL-FEM　/ bodies-ACC-PL-NEUT
　　心が新しい体へ変えられた諸形を語らせる

こうした「不連続構成素」（discontinuous constituent）が可能な理由は，性・数・格の一致を識別できる語尾にある。現代ゲルマン語の多くは語尾を簡素化し，その結果，限定詞や形容詞の語尾は，名詞句のまとまりを示す「シンタグマ・マーキング」（syntagma marking，橋本 1981：153），つまり構成素内の要素間をつなぐ「テープ」の役割を担うに至ったといえる。その典型例は形容詞弱変化語尾 -e/-(e)n であり，固有名詞属格語尾 -s の二重表示の解消（ド die Leiden d*es* jungen Werther-Ø＜die Leiden d*es* jungen Werther*s*

「若きウェルテルの悩み」) に呼応するように，強変化属格語尾 -(e)s を代替している（ド rot*en* Wein*(e)s*＜rot*es* Wein*(e)s*「良いワインの」，welch*en* Wein*(e)s*＜welch*es* Wein*(e)s*「どのワインの」)。弱変化語尾は性・数・格を識別する役割に乏しく，名詞句のまとまりを表示するにとどまる。一方，強変化語尾は性•数•格を識別するが，名詞句のまとまりを表示する役割を担っている点は，弱変化と共通している（清水 2012c)。

形容詞の語尾が上記のシンタグマ・マーキングの役割だけを示すように発達した端的な例に，アフリカーンス語がある。アフリカーンス語は，ゲルマン語の中で英語と並んで激しい語形変化上の簡素化を被った例として知られている。その結果，アフリカーンス語は名詞の性を失い，形容詞も強変化と弱変化の区別を失って，語尾 -e [ə] に統一された。しかも，この語尾は，用いられる名詞句内部の統語的条件とは無関係に，もっぱら形容詞自身の形態的条件に従って付加される。具体的にいうと，語尾 -e は形容詞が 2 音節以上の語（比較級 -er を除く）および母音または d，f，g，s で終わる 1 音節語である場合に，機械的に付加される。限定詞の種類や名詞の単複の区別は，まったく関与しない，

アフ {'n/die} klein {man/vrou/kind}（単数）
{a/the} little {man/woman/child}
{ある/その} 小さな（klein ← klein）{男/女/子供}
{Ø/die} klein {manne/vrouens/kinders}（複数）
{Ø/the} little {men/women/children}
{ある/その} 小さな {男たち/女たち/子供たち}
↔{'n/die} vriendelik*e* {man/vrou/kind}（単数）
{a/the} friendly {man/woman/child}
{ある/その}人なつこい（vriendelik*e* ← vriendelik）{男/女/子供}
{Ø/die} vriendelik*e* {manne/vrouens/kinders}（複数）
{Ø/the} friendly {men/women/children}
{ある/その} 人なつこい {男たち/女たち/子供たち}

一方，オランダ語は両性（common gender，男性と女性の融合）と中性の区別を保っている。オランダ語の限定用法の形容詞は，中性・単数・不定の場合は無語尾，その他は語尾 -e を伴う。形容詞の形態的条件は，原則として（つまり，-en［ə(n)］などで終わるつねに無変化の形容詞を除いて）関与しない。上例では，een klein kind「ある小さな子供（kind 中性）」と een vriendelijk kind「ある親切な子供」だけが klein，vriendelijk のように，両語ともに無語尾となり，その他の場合にはすべて klein*e*，vriendelijk*e* のように，両語ともに語尾 -e を伴う。

オ {een/de} {klein*e*/vriendelijk*e*} {man/vrouw}（両性・単数，不定・定）
{a/the} {little/friendly} {man/woman}
{ある/その} {小さな/人なつこい} {男/女}
{Ø/de} {klein*e*/vriendelijk*e*} {mannen/vrouwen}（両性・複数，不定・定）
{Ø/the} {little/friendly} {men/women}
{ある/その} {小さな/人なつこい} {男たち/女たち}
↔een {klein/vriendelijk} kind（中性・単数・不定）
a {little/friendly} child
ある {小さな/人なつこい} 子供
het {klein*e*/vriendelijk*e*} kind（中性・単数・定）
the {little/friendly} child
その {小さな/人なつこい} 子供
{Ø/de} {klein*e*/vriendelijk*e*} kinderen（中性・複数，不定・定）
{Ø/the} {little/friendly} children
{ある/その} {小さな/人なつこい} 子供たち

ドイツ語などに見られる「冠飾句」（ド erweitertes pränominales Attribut），つまり，名詞に前置する複雑な形容詞句・分詞句の形式を取った修飾要素は，こうした「テープ」の役目をする冠詞や形容詞などの名詞類の語尾に支えられていると考えられる。ここで，Dryer（1992）の「分岐方向理

論」(Branching Direction Theory) を援用しよう。たとえば，動詞と同じく句をなさない要素は「非分岐範疇」(branching category) であり，目的語と同じく句をなす要素で，非分岐的な主要部および句をなす補部からなる内部構造を持つものは「分岐範疇」(non-branching category) である。英 always very kind/ド immer sehr nett のように，句をなさない要素を伴うものは，非分岐範疇とみなされる。Dryer (1992) によれば，一般に分岐範疇と非分岐範疇の語順は，一貫して「右分岐」(right-branching) と「左分岐」(left-branching) になる傾向があり，これは言語処理の効率性と関係があるという。

英 the {kind/always very kind} women
the women {(always very) kind to the children}
ド die {nett*en*/immer sehr nett*en*/zu den Kindern (immer sehr) nett*en*} Frauen

英語の例では，形容詞句 [(always very) kind [to children]] と名詞句 [the women [(always very) kind [to the children]]] は，ともに「非分岐—分岐」の語順になっている。一方，ドイツ語の例では，形容詞句に [(immer sehr) nett [zu den Kindern]] と [[zu den Kindern] (immer sehr) nett] の語順があり，冠飾句としては，後者を用いた die [[zu den Kindern] (immer sehr) nett*en*] Frauen という「分岐—非分岐」の語順だけが可能である。形容詞語尾 -en は形容詞と名詞をつなぐ「テープ」の役目をしており，それがこの語順を支えているといえる。

冠飾句では，形容詞または形容詞変化をする分詞は，名詞の前に隣接するので，前置詞句，目的語，副詞句はその前に置く必要がある。その語順が許されない英語では，冠飾句は不可能である。ドイツ語は，西ゲルマン語で最も広範に書き言葉で冠飾句を用いるといえるが，これには名詞類の変化形がかなり語尾を保持していることのほかに，文体的な性格も強く認められる。おそらく，近世の文法家による規範化への努力，16 世紀以降の官庁語（ド

Kanzleisprache）での使用という社会言語学的要因も，影響を及ぼしているのだろう。OV 型の性格を示す西ゲルマン語の多くでは，冠飾句は有標，つまり好まれない。Dryer (1992) に従えば，これは「前置詞＋名詞句」という「非分岐―分岐」の語順の混入に原因があることになる。ドイツ語と同じく形容詞が語尾を残し，従属文と不定詞句が動詞文末の語順を示すオランダ語では，冠飾句はあるが（①），あまり好まれず，無変化の形容詞・分詞を句全体で英語のように名詞に後置することもある（②）。

オ　① een codificatie van de rechten van [de [onder zijn bewind
a codification of the laws of the under his rule
staande] Germaanse stammen]]
standing Germanic tribes
彼の統治下にある（staande ← staand）ゲルマン人諸部族の法律の成文化

② [het provinciale taalbeleid] [gericht op
the provincial language-policy directed toward
gelijkberechtiging van het Fries op het gebied van
granting-of-equal-rights of the Frisian in the field of
het onderwijs]
the education
教育の分野でフリジア語の平等化に向けられた（gericht）州の言語政策

参考文献

Antonsen, Elmer H. (1975) *A Concise Grammar of the Older Runic Inscriptions*. Tübingen: Niemeyer.

Ásgeir Blöndal Magnússon. (1989) *Íslensk orðsifjabók*. Reykjavík: Orðabók Háskólans.

千種眞一（1983）「ゲルマン語形容詞の強弱変化について」『東北ドイツ文学研究』27．pp. 52–68.

Comrie, Bernard. (1998) The Indo-European Linguistic Family: genetic and typological perspectives. In: Anna Giacalone Ramat/Paolo Ramat (eds.) *The Indo-European Languages*. London/New York: Routledge. pp. 74–97.

Dal, Ingerid. (1966[3]) *Kurze deutsche Syntax auf historischer Grundlage*. Tübingen: Niemeyer.

De Vries, Jan. (1977[2]) *Altnordisches etymologisches Wörterbuch*. Leiden: Brill.

Dryer, Matthew. (1992) The Greenbergian Word Order Correlations. In: *Language* 68. pp. 81–138.

Fischer, Hans. (Hg.) (1966) *Schrifttafeln zum althochdeutschen Lesebuch*. Tübingen: Niemeyer.

Greenberg, Joseph H. (1963) Some Universals of Grammar with Particular Reference to the Order of Meaningful Elements. In: Joseph H. Greenberg (ed.) *Universals of Language*. Cambridge, MA: The MIT Press. pp. 73–113.

橋本萬太郎（1981）『現代博言学』大修館.

Hawkins, John. (1980) *Word Order Universals*. New York: Academic Press.

Heusler, Andreas. (1967[7]) *Altisländisches Elementarbuch*. Heidelberg: Winter.

Hinterhölzl, Roland/Petrova, Svetlana. (2010) From V1 to V2 in West Germanic. In: *Lingua* 120. pp. 315–328.

Hinterhölzl, Roland/Petrova, Svetlana. (2011) Rhetorical Relations and Verb Placement in Old High German. In: Christian Chiarcos et al. (eds.) *Salience*. Berlin/New York: De Gruyter. pp. 173–202.

Hopper, Paul J. (1975) *The Syntax of the Simple Sentence in Proto-Germanic*. The Hague/Paris: Mouton.

Jasanoff, Ray. (1994) Germanic (Le germanique). In: Françoise Bader. (ed.) *Langues indo-européennes*. Paris: CNRS Editions. pp. 251–280.

亀井孝/河野六郎/千野栄一（1996）『言語学大辞典第 6 巻術語編』三省堂.

Kayne, Richard S. (1994) *The Antisymmetry of Syntax*. Cambridge, MA: The MIT Press.

Kuhn, Hans. (1955) Zur Gliederung der germanischen Sprachen. In: *Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur* 86. pp. 1–47.

Lehmann, Winfred P. (1973) A Structural Principle of Language and its Implications. In: *Language* 49. pp. 47–66.

Nichols, Johanna. (1986) Head-Marking and Dependent-Marking Grammar. In: *Language* 62. 56–119.

Noreen, Adolf. (1970[5]) *Altnordische Grammatik I*. Tübingen: Niemeyer.

Prokosch, E. (1939) *A Comparative Germanic Grammar*. Philadelphia: Linguistic

Society of America.

Ramat, Paolo. (1981) *Einführung in das Germanische*. Tübingen: Niemeyer.

Ringe, Don. (2006) *From Proto-Indo-European to Proto-Germanic*. Oxford et al. Oxford University Press.

Schrodt, Richard. (2004) *Althochdeutsche Grammatik II. Syntax*. Tübingen: Niemeyer.

柴谷方良(1989)「言語類型論」柴谷方良/大津由紀雄/津田葵『英語学の関連分野』pp. 1–179. 大修館.

清水　誠(2002)「チャレンジコーナー」『月刊言語』Vol. 31　No. 2. pp. 112–118. 大修館書店.

清水　誠(2005)「言語規則と普遍性—フリジア語と関連言語における名詞抱合，品詞転換，逆成」『ドイツ文学』127. pp. 49–66. 日本独文学会.

清水　誠 (2006)『西フリジア語文法—現代北海ゲルマン語の体系的構造記述』北海道大学出版会.

清水　誠(2012a)「ゲルマン語の歴史と構造 (4)—古ゲルマン諸語 (2)—」『北海道大学文学研究科紀要』136. pp. 53–101.

清水　誠 (2012b)『ゲルマン語入門』三省堂.

清水　誠 (2012c)「ゲルマン語形容詞強•弱変化の非文法化」『歴史言語学』第 1 号 (印刷中). 日本歴史言語学会.

Sievers, Eduard. (Hg.) (1966 (1892)) *Tatian. Lateinisch und Deutsch mit ausführlichem Glossar*. Zweite neubearbeitete Ausgabe. Paderborn: Schöningh.

Smith, J. Robert. (1981). *Word Order in the Older Germanic Dialects*. Ann Arbor/London: University Microfilms International.

Speyer, Augustin. (2007) *Germanische Sprachen*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

Streitberg, Wilhelm. (1920[6]) *Gotisches Elementarbuch*. Heidelberg: Winter.

Tomlin, Russell S. (1986) *Basic Word Order: functional principles*. London: Croom Helm.

Vennemann, Theo. (1974) Topics, Subjects and Word Order: from SXV to SVX via TVX. In: J. M. Anderson/C. Jones (eds.) *Historical Linguistics I*. Amsterdam/New York: North-Holland. pp. 339–76.

Whaley, Lindsay J. (1997) *Introduction to Typology*. Thousand Oaks et al.: SAGE Publications. (大堀壽夫他訳　2006『言語類型論入門』岩波書店)

Wicka, Katerina Somers. (2009) *From Phonology to Syntax: pronominal cliticization in Otfrid's 'Evengelienbuch'*. Tübingen: Niemeyer.

Yoshida. Kazuhiko. (2004) Word Order and Word Order Change in the Older Germanic Languages. In: *Studies in Anatolian and Indo-European Historical Linguistics*. Graduate School of Letterds, Kyoto University. pp. 200–231.

＊本稿は紙面の制約で十分に論じ尽くせなかった下記の拙稿の前半部に大幅な加筆を施し，約 2 倍の分量に改めて，別個の論考としたものである。

「語順の変遷―ゲルマン語類型論の視点から」(新田春夫/高田博行(編)『講座ドイツ語学第 2 巻　ドイツ語の歴史論』ひつじ書房．2013.3.刊行予定)

＊本研究は科研費（21520425）の助成を受けたものである．